

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第633号 平成25年10月28日

## アイヌ文化「象徴空間」(2)

政府は、国の同化政策がアイヌ民族の暮らしや文化に打撃を与えて来たという歴史認識を明確に打ち出していますが、現実の政策は、アイヌ文化の振興に軸足が置かれており、アイヌの人々の生活向上は後回しになっているといっても過言ではありません。

「原住・アイヌ民族の権利を取り戻すウコチャランケの会」の代表石井ポンペ氏は、「国会決議から5年、何も変わっていないというのが正直な思いだ。決議のきっかけになった国連宣言に立ち返り、民族の権利復活を考え欲しい(6月29日付北海道新聞)」と述べています。恐らく、こうした思いはアイヌの人々に共通するものでしょうし、その意味でも、今後「象徴空間」の整備と並行して、より実効性のある生活・教育支援を行って行く必要があると思います。

それと同時に問われるべきは、北海道に住む我々自身が、どれ程アイヌの事を理解しているかという事です。



【アイヌ文化振興・研究機構のホームページから転載しました】

学校教育の中でも、アイヌの伝統や文化について十分教育が行われているとはいえないと思います。北海道人でありながらアイヌの事は殆ど知らないというのが実態ではないでしょうか。そもそも我々が「日本人は、単一民族だ」という誤った認識から解放されたのは、そう古い話ではないのですから。

だから私達は、観光地の土産物屋さんや、アイヌ舞踊を演じているアイヌの人々を見て、アイヌの事が少しは分かったつもりになってはいけないのではないかと思います。

アイヌの人々の置かれている現状について、阿寒湖畔のアイヌ・コタンに生まれた瀧口夕美さんは「同化が進んで、ほとんど滅びた民族とみなされながら、一方ではアイヌとして原始的な暮らしから抜けていない、珍しい人たちとみなされる。その矛盾を説明するかのような言い方に『観光アイヌ』という呼び方がある。観光で身を立てるアイヌは、自分たちの民族性を金のために切り売りしている、という、侮蔑の意味をこめた呼び方だ。自らを自虐的にそう呼ぶこともある。それはまるで、

本当はアイヌではないのに、アイヌであるかのようにふるまう態度を指すのではないか？ 『純粋なアイヌはもういないんだよね？』という問いは、そのことを聞いているのではないか。」と述べています（同氏著「民族衣装を着なかったアイヌ」から）。

更に瀧口さんは、アイヌへの教育は、皇民化を前提とした日本人への同化を目的として行われたものだが、果たして、アイヌは「同化」されているのかと、疑問を呈しています。察するにそれは、彼女が、「アイヌは滅んだのではなくて、生活スタイルを変えながら今に至ったのだ（同氏著「民族衣装を着なかったアイヌ」から）」と述べている様に、一見同化しているように見えても、実はそうではないという心の叫びのようにも聞こえます。

世界は急速にグローバル化が進んでいますが、グローバル化が進むという事は、一言でいえば人種、文化、価値観等あらゆる多様なものを飲み込みながらダイナミックに変化して行くという事だと思います。

それは、自分と異なるものを自分達に同化させようとするのではなく、その違いを認めた上で、お互いに理解し、受け入れる努力をする事なしには築くことの出来ない世界です。

日本人は、島国という特異な環境によってその変化から守られてきた部分は大きいと思います。しかし、今後日本人が国際社会の中で生きて行く為には、その大きな変化の渦に自ら身を置いて行くしかありません。

その為にも私達は、今後一層、自分達とは異なる民族や伝統・文化、更には価値観を積極的に学ぶ努力をして行かなければなりません。

アイヌ民族の「象徴空間」の整備は、まさにその契機となるものであり、また、その様にしていかなければならないと強く感じています。（塾頭：吉田 洋一）